

## 親鸞教義に

## 於ける信心の智慧 (二)

内藤 知康

一昨年、昨年に引き続き、親鸞教義に於ける信心の智慧に対する考察を進めてゆくわけであるが、本年は昨年考察した信心の智慧の二側面、即ち随順と悲歎のうち、特に悲歎の側面をとりあげて考察を進めたい。

昨年考察した如く、悲歎は信心の体であるところの仏智のうち、空無我を知る慧が行者に体现したものと見える。しかし、仏自身に於いては執着を遠離するという形で体现される慧が、煩惱具足の行者の身の上には、執着すべからざるものに執着している自己、阿弥陀仏によって知らしめられた自己の現実相をどこまでも深く悲歎してゆくという形で体现される。それは『歎異鈔』の「よろこぶべきことをよろこばぬ」との表現に対して云えば、正しく悲しむべきことを悲しむ相と云えよう。仏に対して凡夫と表現される人間存在が、往々にして悲しむべからざることを悲しみ、悲しむべきことを悲しまざるのに対し、この悲歎は、何が真に悲しむべきことであるのかを正確に見きわめた悲歎と云えよう。それ故にこの悲歎は信心の智慧の機相に発せられたものであると云い得るのである。

さて周知の如く『教行信証』に於いて悲歎を示す「悲哉」という言葉は二箇所に見られる。一つは『信巻』真仏弟子釈下であり、一

つは『化巻』真門釈下である。では、この二つの「悲哉」はどの様に關係づけられるのであろうか。まず、両者の差異を考えてみると『信巻』の「悲哉」はその後に「愚秀鸞」とその悲歎が自己に向けられていることが明示される。それに対し『化巻』の悲歎はその対象が「垢鄞凡愚」と示され、その垢鄞の凡愚が必ずしも自己を含めたものであるとは云えない。この点に関して先学の解釈も一樣ではない。石泉師は「随聞記」に於いて、「自ニ寄セテ、広ク行者ニ示シ悲哉ト云」と解釈し、善讓師は「敬信記」に於いて、『正像末和讃』の「三恒河沙の諸仏の出世のみもとにありしとき」と引き、垢鄞の凡愚とは親鸞自身のことであるとすることが如きの解釈である。それに對し円月師は「仰信録」に「他ノ情執ノ棄テ雖キコトヲ傷ミ」と解釈し、大江淳誠氏も「教行信証体系」に於いて、「凡夫自力の迷執に拘はつて他力の大信を得ざることを悲傷さるる誠しめの意」とし、要真二門の所廢を示さんとする意であると解釈されている。この様に『化巻』の悲歎の対象である垢鄞の凡愚に対する解釈は先学に於いても一樣ではないが、この部分を素直に見る限り、垢鄞の凡愚とは、先に「専修<sup>ニテ</sup>難<sup>カ</sup>者」と示し、後に「以<sup>ニ</sup>本願<sup>ヲ</sup>嘉<sup>ス</sup>号<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>己善根」と示されている点よりすれば、当面、真門の行者を指し示しているものと思われる。即ち『信巻』の悲歎が弘願転入後の自己の現実相を傷むものであるのに對し、『化巻』の悲歎は未だ弘願に入らざる自力執心の行者に対する悲歎である点に両者の差異をみる事が出来る。しかしながら『化巻』の悲歎はその対象が真門の行者であるといえ、単に所廢を示すだけにはとどまらない。村上速水氏が既に指摘されているように、親鸞が要真二門の過失を指摘して批判する場合、そこにはそれを客羅的な立場から叱責するという

ことでなく、むしろ既往の自己の過失が暴露されており、あやまつて同じ轍を履むことなかれという悲願がこめられている。その意味で「悲哉、垢那凡愚自<sub>三</sub>從無際<sub>三</sub>已<sub>三</sub>來云々<sub>三</sub>」の文は、当面は真門の行者を傷んだものであるが、そこには親鸞自身の既往の姿が投影されているの悲歎であると云えよう。

初めに論じたごとく、悲歎は執着すべからざるものに執着している自己を傷むものである。それは『信巻』の悲歎に於いてその基本的な形を示す。しかしながら『化巻』の悲歎に於いてはその趣きを異にする。そこでは、何が執着すべからざるものであるかを正確に見きわめながら、それに執着していた既往の自己を未だ執着し続けている他者に重ねあわせて悲歎しているのである。逆に云えば、現実に悲歎すべき状態にある他者を自己に引き寄せて、自己の傷みとして悲歎しているのである。そこには衆生の病を自己の病として受けとめる大乘菩薩道の智慧、自他不二性に立脚した仏智の発現とも云い得るものがあると云えないであらうか。悲歎の淵源と考えられる機の深信は「自身ハ」という形で示される。しかし、機の深信を表現したものと考えられる『信巻』三問答法義釈下機無真実を示す部分に於いては「一切群生海」として、単に自己一人にとどまらないことが示される。本願の「十方衆生」は親鸞にとって「親鸞一人がため」として受けとめられた。しかしこの「親鸞一人」は単に「十方衆生」の集約としてのみの「親鸞一人」ではなく、再び「十方衆生」に展開してゆくべき「親鸞一人」である。弥陀の本願は、我一人のものとして主体的に受けとめてこそ、その真実義が明らかにされるものであり、その真実義が明らかになってこそ、それが十方衆生の為のものであることが真に領解されるのである。そして弥陀

陀の本願が十方衆生の為のものであることが真に領解されることによって、本願を疑謗する自力執心の行者を単に客観的に批判することなく、既往の自己に重ね合わせた真の悲歎が生ずるのである。『末灯鈔』に「この念仏する人をにくみそしめる人おもにくみそしることあるべからず、あわれみをなし、かなしむころをもつべし」と示されるものは、この間の消息を伝えていると云えよう。

親鸞に於ける悲歎は執着すべからざるものに執着していることを悲歎するという形で、執着すべからざることを知る信心の智慧の一発現であり、しかもその悲歎は自己に向けられるのみならず、執着すべからざるものに執着している他者にも向けられるものであった。そこには、他者と自己を同一化する、自他不二の仏智を根底とする智慧の眼が存在する。勿論、煩惱成就の凡夫と云われる存在は仏自身の如く完全な自他不二性を証する仏智は持ち得ない。しかし、弘願転入の自己、弘願未入の真門の行者という差別性を保持しつつ、弘願未入の真門の行者を既往の自己と重ね合わせて真に悲歎するということ形で自他不二性を知る一面を持っていると云えよう。それは、智慧の名号と云われる弥陀廻向の名号を根底とした信心の智慧の体現と云えよう。

附記 粗雑な考察であり、将来もう少し深く掘り下げてみたいという希望を持っているが、一応、信心の智慧に対する考察は一段落とした。御教示、御批判等賜われれば幸である。

- 1 真宗全書二八卷 一一四頁。
- 2 同 三一卷 六一三頁。
- 3 真宗叢書 七卷 三四七頁。
- 4 教行信証体系 一一二頁、二二六頁。
- 5 覚如教学の基本姿勢と親鸞の立場 仏教文化研究所紀要 第十五集 九頁。(本願寺派宗学院研究生)